いのちと健康を守る活動

indigenous(先住民族) でなくても indigent(貧困)ならば Philhealth の保険料無料
ー　ビラーンやモロの村で進む保険加入　ー

2011年発行の64号で、CMIP地域限定の医療相互扶助システム「グリーンカード」がほとんど機能していないとお伝えしました。しかし、2011年11月現在、入院時の経費を保証する国民健康保険Philhealthへの加入者が、ビラーンの村でも増えていることが分かりました。

ノビシエート寮で奨学生の一人カルメラに近況を聞いた時です。竹串作りの内職で家計を支えていた母親が入院して大変というので、入院費はどう工面したか尋ねました。Philhealth に加入していて無料だったとのこと。彼女の家だけでなく、ダタルフィタク村の全世帯が加入済みのようです。

ヘルス担当のジョジョさんに確認すると、アトゥモロックやサムラングのあるマルンゴン町も、貧困家庭の国民健康保険加入に力を入れているとのことでした。

保険証交付前Philhealthスタッフ及びPIHSスタッフ・ノーマさんの説明を聞く事業参加者

一方、プロジェクトベースで医療支援を継続中のモロの村の場合は、今年度、45名を対象に国民健康保険の加入支援を行いました(今井記念海外協力基金助成)。11月26日、その保険証交付の日に空港に着き、ウハウにあるPIHSの研修会場(2010年度松尾基金助成)に直行し、Philhealthの保険証の授与式を見学しました。月100ペソの保険料の最初の3ヶ月分を支援して保険加入のメリットを実感してもらい、4カ月目からは自分で支払うという仕組みです。被保険者の45名は事業対象5村の健康組合メンバーです。月例集会の場で互いに保険のメリットを確認しながら、頑張って保険料納付を続けていくことを期待しています。

山の先住民族に比べて現金収入を得る機会が多いモロの被保険者ですが、申請すれば保険料が無料になるケースもあるのではと聞いてみました。

「ビラーンと異なり、モロは indigenous(先住民族)としての特典はない、indigent(貧困)ではあっても役所で貧困証明を受けたがらない、あるいは申請しても担当者の偏見などで認められない場合がある」というナプサさんの説明から、モロ故の問題があることも分かりました。

「先住民族」と「貧しい」をあらわす英語の発音が似ていて、説明を受ける私の中にも混乱があり、レイクセブ訪問に同行したビラーン人看護師レアさんに最終確認しました。「貧困ラインの年収1万ペソ(約2万円)以下であれば、先住民族に限らず保険料なしで加入できる」ということです。

Philhealth はあくまでも入院保険です。通院等の経費を相互扶助する CMIP のグリーンカードの役割が終わったわけではありません。私たちの限られた医療支援が、優先度の高いニーズに充当できるように、グリーンカードや Philhealth 加入普及の自助努力に期待したいところです。

なお、2010年(1-12月)CMIPの報告によると、ヘルスプログラム資金41.2万ペソ(約80万円)に占めるグリーンカード収入は1.2万ペソで、約3%です。残り97%がHANDS支援金です。

一方で、モロの医療プログラムでグリーンカードに該当するものは、各村の健康組合です。組合役員がしっかり組合費を徴収しています。各村30世帯ほどの組合加入者がいれば、通院治療程度はこの域内保険でまかなえるようです。

ジョジョのクリニック報告 10ー11 月分より

＊支援患者数:35 名
風邪・ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ 16・胃腸疾患 4・アレルギー性皮膚炎 3・外傷 3・結核 2・腫瘍による頭痛1他

＊巡回診療:
10/14:サムラング(歯科 26 人)
11/12:タンダ(一般診療 178 人・歯科 22 人)

＊その他の活動から
10/25-26:ルタイでのハーブ畑、トイレ、簡易水道等のニーズ調査
11/2-9:ヘルメニアのマニラ心臓センター定期健診
11/14-18:ルタイでのハーブ薬製造研修